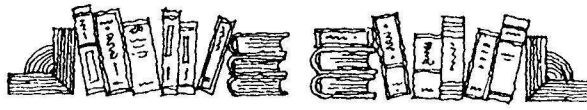


国語国文学会だより



No. 15

1996. 8

日本文学科卒業生の会

国語国文学会 春の総会・研究発表会報告

平成八年度春の総会・研究発表会が、五月二十三日(木)、香雪館四〇一番教室において開催されました。

◆第一部 総会

(1)挨拶

源 五郎先生

(2)国語国文学会委員長挨拶・役員紹介

(学生の会・卒業生の会)

(3)平成七年度活動報告・決算・監査報告

(4)平成八年度活動計画・予算案・監査選出

(3)(4)については、学生、卒業生より各々報告・説明があり、各案件とも審議、承認されました。卒業生の会では、好評の文学散歩(第三回)を企画しています。

(5)自主ゼミ紹介・報告

◆第二部 研究発表会

(1)額田王―蒲生野の歌(学生自主ゼミ・上代)

館野 奈津子

(2)鷗外を歩く―台湾と鷗外(卒業生の会)

新妻 佳珠子

(3)「或る女」―葉子と都市空間(平成七年度卒業生)

池川 久美子

今年度より学生、卒業生の会より活動を通じての発表が新たに加わり、また新一年生の多くの参加があって親しみやすい大会となりました。ただ、例年行われていた奨学金の授与が金利の低下

という厳しい世相を反映して中止せざるを得なかった由で、残念なことでした。
大会に先だって、回生委員会が開かれ、常任委員の選出が行われました。

秋季大会・公開講演会のご案内

日時・平成八年十一月三十日(土) 一時～
講演者 随筆家 青木 玉 氏

幸田露伴を祖父に、幸田文を母とする随筆家。『小石川の家』で文部大臣奨励賞受賞。朝日新聞日曜版に「なんでもない話」連載中。

本学教授 佐久間まゆみ氏

*研究発表会 午前十時～十二時

―大会・講演会・研究発表会・詳細次号―

◆右研究発表会での発表者を募集します◆

ご希望の方は、左記によりご応募ください。

(発表時間三十分、質疑十分)

・応募資格 本学国語国文学会会員

・応募方法 四〇〇字以内に発表要旨をまとめ、論題とともに申し込む。

・応募先 日本文学科研究室内「国語国文学会秋季大会研究発表者募集係」宛

九月二十五日(水)

締め切り

選考方法

国語国文学会において選考、結果は後日、個別に連絡する。

日本女子大学 国語国文学会

◆総会議事より◆

平成八年度「卒業生の会」活動案

(1) 総務

- ・春季総会・研究発表会の開催 五月二十三日(休)
- ・はがき通信 五月、十一月
- ・新卒業生の方々へ、入会のお誘い発送 八月
- ・組織の強化 各回生に委員を選出する

(2) 企画

- ・自主ゼミの設立
- ・秋季大会の開催

研究発表・総会・公開講演会・懇親会

(3) 会計

- ・第三回文学散歩の実施
- ・談話会の企画・実施
- ・会費納入への協力依頼
- ・活動充実のための備品の整備・購入

(4) 編集

- ・「国語国文学会だより」の発行
- ・春の号・八月、秋の号・十一月
- ・会員名簿(追加分)の発行

平成八年度研究サークル

○平安文学談話会(平安文学に関する研究)

金曜日 午後五時半または土曜午後二時(年四回)

日本文学科研究室

・高野晴代 ☎〇三(三三七〇)六八〇六

○皇女研究会(皇女総覧平安朝篇の作成)

毎月第二土曜日 午前十時半

大学図書館共同研究室

・柳澤理恵子 ☎〇四五(八四二)六五二五楠木方

○古代中世文化論(中世の芸術論)

毎月第四日曜日 午後一時半

日本文学科資料室四二二六

・山田佐和子 ☎〇三(三九七二)四八四三

○中島斌雄先生の俳句を読みながら

毎月第三土曜日 午後二時

中島斌雄先生宅

・綾野道江 ☎〇四四(九六六)五四二五

参加ご希望の方は、各サークル代表者に随時お申し込みください。

◆研究室スタッフご紹介◆

文学部部長 喜安 朗先生(史学科)

日本文学科科長 源 五郎先生(近代文学)

浅野 三平先生(近世文学)

阿蘇 瑞枝先生(上代文学)

麻原 美子先生(中世文学)

後藤 祥子先生(中古文学)

倉田 宏子先生(近代文学)

佐久間まゆみ先生(日本語学)

清水 康行先生(日本語学)

高橋 智子先生(近代文学)

田辺 和子先生(外国人留学生特別科目)

谷中 信一先生(中国思想史) 中国留学中

藤原 浩史先生(日本語学)

助手

植田 泰代・白石 美鈴・溝部優美子さん

○国語国文学会担当

浅野先生、高橋先生、植田さん

日本女子大学国語国文学会 会計報告

(平成7年度卒業生の会 決算報告 1996. 4. 30 現在)

【収入の部】		(円)
前年度繰越金	720,293	
会費	505,000	
利子	2,436	
図書販売	20,110	
収入合計	1,247,839	
【支出の部】		
通信費	239,502	
文具代	16,445	
コピー代	15,710	
会報印刷費	131,000	
新入会員名簿費	0	
委員会活動費	19,570	
交通費	34,000	
行事費	5,440	
ゼミ費	40,000	
講演会費(講演料)	25,000	
大会諸経費	20,096	
新会員PR費	11,600	
発会準備金返済費(6回目)	100,000	
慶弔費	0	
支出合計	658,363	
繰越金	589,476	

上記の通り決算報告致します。

会計 安東佳代子(代表) 保志美也子(監査)

監査の結果、上記決算報告が正確であることを認めます。

監査 荻窪昭子 岩野圭子

(平成8年度卒業生の会 予算案)

【収入の部】		
前年度繰越金	589,476	
会費	550,000	
収入合計	1,139,476	
【支出の部】		
通信費	250,000	
文具代	35,000	
コピー代	20,000	
会報印刷費	150,000	
新入会員名簿費	20,000	
委員会活動費	30,000	
交通費	40,000	
行事費	10,000	
ゼミ費	50,000	
講演会費(講演料)	50,000	
大会諸経費	30,000	
新会員PR費	20,000	
発会準備金返済費(7回目)	100,000	
慶弔費	10,000	
予備費	324,476	
支出合計	1,139,476	

◆春の総会・研究発表会より◆

文学散歩 森鷗外を歩く―台湾と鷗外

新妻佳珠子（新3）

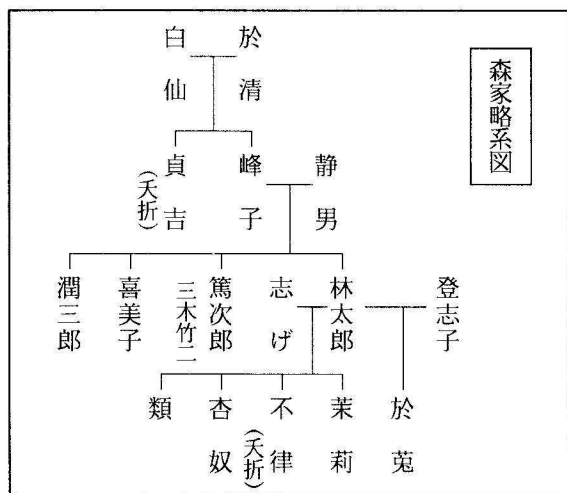
文京区立鷗外記念本郷図書館（千駄木1-23-4）は、森鷗外が明治25年から大正11年7月9日60歳で死を迎えるまで住んだ、いわゆる観潮楼跡である。この一隅に鷗外記念室があり、数多くの鷗外の遺品が、第二の妻しげ、弟篤次郎（歌舞伎評論家・筆名『三木竹二』、妹小金井喜美子（翻訳家）、弟潤三郎（鷗外の最初の評伝を執筆）の遺品とあわせて展示してある。中でも中心的な鷗外遺品の多くは、昭和11年長男於菟が携えて台湾へ渡り、日本の敗戦後は引揚げた於菟の依頼を受けた蔡錫圭氏をはじめ多くの台湾の人たちの好意によってまもられ、昭和28年9月、日本へ戻された、という数奇な経緯をもつ。

台湾と森鷗外の関係は、明治28年、日清講和後日本へ割譲された台湾の反乱鎮圧のための日本軍の軍医として滞在した約四ヶ月間。これは日本の近代作家の中では初の足跡となるのだが、鷗外は、あの膨大な作品群の中で全くといっていいほど台湾には触れていない。しかし、公人としての『台湾総督府医報』8編を見ると、精力的な活動と共に衛生学者としての鋭い観察・指摘が詳述されている。その骨子は、上水・下水整備の必要性の強調につぎののだが、この見解は容れられないまま鷗外は台湾を離れなければならなかった。

それから40年後、於菟は台北に開設された国立台北帝大医学部教授として渡台する。鷗外を取りまく複雑な家庭関係から逃れるように、父の遺品のほとんどを持つての、台湾に骨を埋める覚悟の赴任であった。父と同じく医を志す於菟の胸底には、深い感懐があったのであろう。

平成6年度に行った第1回の文学散歩は、本来、処女作『舞姫』を執筆し、赤松登志子との新婚生活を送った上野花園町の現在の『舞姫の家』を起点に、『青年』『キタ・セクスアリス』に描出された根津神社、通称ネコの家跡（鷗外、漱石旧居跡）、観潮楼跡とたどるべきだが、諸々の都合で逆コースとなった。

森家略系図



◆文学散歩へのお誘い 10月26日(土)◆

―田端文士村を訪ねる―

芥川龍之介、室生犀星、田河水泡、平塚らいてう、佐多稲子など多くの文人が住み、田端文士村と称される一帯を訪ねます。芥川の旧宅跡、大竜寺で子規の墓に詣で、王子に出て文人に愛された扇屋でちよっと贅沢ですが当時を偲ぶお弁当を頂き、古河庭園（コンドル設計）を見学します。

皆さま、どうぞ、ご参加を!!

・案 内 新妻佳珠子（新3）

・日 時 10月26日(土) 午前10時30分

・集合場所 山手線田端駅北口

田端文士村記念館ロビー（改札

を出て左手円形ビル1階）

・所要時間 約5時間

・費用 昼食代 三千元 他人館料

・申し込み 10月16日〜22日

・連絡先 企画係・平山静 夜間に

(〇三・五三九八・三七〇一)

企画係

*お知らせ

・振替用紙を同封いたしました。本年度会費の納入を、よろしくお願い申し上げます。

・住所変更の節は、ご連絡ください。

『蜻蛉日記解釈大成』を完成して

上村 悦子

昭和二十七年頃、池田亀鑑博士が『源氏物語大成』、田中重太郎博士が『校本枕草子』を次々出版されていた。たまたま国文学の学会で皆さんとお茶を頂いていた時、学習院大学の松尾聡教授が「授業に『蜻蛉日記』をやりたいが、まだ校本も無いので出来ない」と誰にともなく洩らされたのを耳にして、私は『蜻蛉日記』の校本を作成してみよう

と決意し、早速『蜻蛉日記』の写本を所蔵の宮内庁書陵部を始め、各文庫や図書館を次々お訪ねして校本を作り始めたのが動機となつて、『蜻蛉日記』の研究が私のライフワークとなつた。

まず、最初は校本の作成で岩波文庫（喜多義男但し先生のお考えで自由に字句が改められ、宮内庁本の本文と異なる）を底本にして、官内庁本、阿波国文庫本、松平文庫本、上野図書館本、大東急記念文庫本、水戸彰考館本等二十一二写本を書写していき（中、校本に載せたのは十二写本）後、正確を期すために写真にとつた。そのお陰で字形が解り、各写本間の字を比較して古写本の書写の順序を推定することが出来、また、ABCの三系統を判定することが出来たのである。こうして『蜻蛉日記 諸本の研究』を昭和三十八年古典文庫より出版した。

第二冊目『蜻蛉日記の研究』は、『蜻蛉日記』の名義考、蜻蛉日記の成立論（日記文学の本質、構

造、各巻の性格、成立について）、蜻蛉日記版本の研究、蜻蛉日記年表（以上第一部）、次に第二部として作者の研究で、家系、血族（父母、兄弟、姉妹、道綱、孫、養女）、作者の生涯（名、容貌等）、少女時代、結婚時代（夫兼家、他の妻達、また交友関係）、晩年。歌人道綱母、作者の人間像。作者及び周辺の人達の年表、系図等の研究をまとめ、昭和四十七年三月、明治書院より出版出来た。

続いて日頃『岷江入楚』にあこがれていた私は、蜻蛉日記を研究する時は真先に使用し、常に側に置いて参考にするのと重宝な本を書こうと考え、『蜻蛉日記解釈大成九巻』の執筆を企画した、昭和五十二年であった。その方法として坂徴の『蜻蛉日記解環』を先頭に江戸時代の学者、これまでに出版された現代の先輩・知友の『蜻蛉日記』の解釈に関する成果を結集し、文殊の知恵によって本文を正しく読解すること、原本復元に努めた。書名をあげることを省略するが、二十二種の諸本である。また、読解に役立つような論文も出来る限り補注にあげた。こうして漸く平成七年六月三十日全九巻が完成、明治書院より出版された。

その間、眼の手術、腰痛、妹二人の急死などに遭つた。完成した時思いがけなく日頃ご芳情を頂いている五島茂先生から、

蜻蛉の大成全九巻遂に成りぬうやまひておもふ君のよろこび

梅雨冷えのけふ巨き仕事遂げたまふいよよ健やかに お目まもりませ

賜つた過分の玉詠を繰り返しつゝ涙が後から後から頬をぬらした。今後は今までの成果を

駆使して、正しい本文の確立に努力したいと願っている。

蜻蛉日記の作者道綱の母は、自分が歩んだ真の人生と今一つ日記文学という作品の主人公という二つの人生を持った才媛となつたのである。

さて、努力、努力しか何の取得も持たぬ私のささやかな業績で深く反省しているが、以上三種の書を世に残すことが出来たのは多大の学恩をいただいた各時代の多くの研究者の諸先生、また校正でお世話にあずかった皆様方、また出版社のお陰と深謝申し上げる次第である。

* 企画係 第二回文学散歩の報告 *

平成七年十月二十八日（土）、明治時代の文人の里、根岸界隈、幸田露伴の『五重塔』の舞台を、天王寺、五重塔跡、幸田露伴の『五重塔』執筆した家跡等を合中墓地周辺に探りました。

『五重塔』のモデル天王寺では、思いがけず秘仏拝観、戊辰戦争時の刀傷の残る寺内、美しい屋久杉でできた本堂をゆっくり見学できるという幸運に恵まれました。

その後、朝倉彫塑館で朝倉文夫の他佐藤忠良の彫刻、朝倉文夫旧居の和風建築と庭の美を楽しみ、遅い昼食を鵜外の『舞姫』執筆の家を見ながらとり、解散しました。

新妻記

一九九六年八月二十日

発行・日本女子大学日本文学科

国語国文学会卒業生の会